

2018（平成30）年度 大阪大学 文学部 入試問題 第2問 解答例

Ⅱ

問一

兄栄一の声についての「尖っていた」という慣用的な比喻表現は、四年ぶりの会話であるにもかかわらず、弟辰男に対する兄の物言いが「相変らず」怒りっぽいきつい口調であることを意味し、兄弟が常時一方的で強い上下の序列的關係にあることを暗示する効果がある。

問二

辰男は、目にするものごとを英文にすることに没頭していた最中に栄一の質問を不意に受けたので、一瞬質問に対する理解が遅れたうえに、英語を勉強する意図を問われても、具体的な目的があるわけでもなく、また、とくに面白いと感じているわけでもなかったから。

問三

許されれば学校に入って真剣に英語を学ぶ気があるのかと問う兄の語調は前とは異なり穏やかであったが、語勢鋭く罵り嘲る調子で自分の英語学習が無価値であると断じられたときの侘しく情けない気分から辰男は立ち直れず、兄への態度を硬化させ、素直になれずにいる。

問四

三十近い年齢になっても独身のまま実家にいて自立せず、小学校の代用教員をしながら正教員や中学教師を目指すでもなく、無目的に日々を送る辰男にとって、英文を書くことは、英語力が社会的に評価される望みなどないが、他事を閑却して没頭できるという意味がある。